

されるべきだろう。

またこの点と密接に関わる事であるが、神の *aenigma* としての *possest* に関して、著者はその三一性に言及しつつも十分に考え抜いてはいないように思われる。評者はここに *<exemplar—imago>* の関係が設定されており、そこから人間も関わるものとしての「擬三一的垂直構造」が抽出できると考えている（拙論『*Omnipotens Deus* の復権』）が、その方向への考察はない。この著者による一層包括的な *Cusanus* 論に期待したいと思う。

Martin Grabmann : *Gesammelte Akademieabhandlungen.*

Herausgegeben vom Grabmann-Institut der Universität München.

Paderborn-München-Wien-Zürich, Ferdinand Schöningh, 1979

(Veröffentlichungen des Grabmann-Institutes zur Erforschung der mittelalterlichen Theologie und Philosophie, Neue Folge 25/I und II), pp. 2220

K. リーゼンフーバー

ヘーゲルから根本的影響を受けた19世紀中葉のチュービンゲン学派が消滅した後、カトリック神学の潮流は中世の伝統、とりわけボナヴェントゥラとトマス・アクィナスへの実り豊かな研究に向かった。この傾向は続く一世紀間の神学に決定的な刻印を残したものである。ところで、中世哲学・神学史の先駆的研究者のなかで、エールレ及びポィムカーと並んで、神学史家としてのマルティン・グラープマンの業績は傑出している。ミュンヘン大学グラープマン研究所は彼の生誕（1875年）100年を記念して、中世思想史に関するグラープマンの研究を大部な二巻本として刊行した。これは1921年から1944年までにバイエルンとプロイセンの「学術アカデミー」（*Akademie der Wissenschaften*）の会議報告書及び研究論文集に発表された論文の集大成である。ここに収められた23の広領域にわたる論文はグラープマンの作品

中で重要な位置をしめるものであるから、現在では入手の困難な個別研究論文と原典のリプリントは中世研究者に感謝をもって迎えらるることであろう。2000余頁にわたる膨大な資料は、巻末の六つの模範的で、最近の研究の立場を考慮にいたした索引（写本索引、古代・中世人名索引、1500年から現代に至るまでの人名索引、地名索引、事項索引、ラテン語用語索引）によって利用しやすいものになっている。この索引は200頁以上にわたっていて、それだけで一冊の本となるほどであるが、その案内に従えば、この二巻は中世研究、ことに中世アリストテリズムの研究にとって必要欠くべからざる宝庫となるであろう。本書の序文（xxxii頁）は、ミヒャエル・シュマウス氏の手になるもので——彼は長い間ミュンヘン大学でグラープマンが受け持っていた教義学の講座の後継者であり、グラープマン研究所の所長であった——その深い理解によってグラープマンの生涯と著作の跡をたどり、すぐれた紹介となっている。

ところでグラープマンは、アイヒシュテットの神学校で哲学・神学の養成を受けて以来すでに、その先生を通してトマス・アクィナスに接し、その思索に導き入れられていた。この関心はローマにあるドミニコ会の大学で神学史の研鑽を積むことによって深められた（1900—1902年）。ローマにおいて彼は秀れた中世研究者であり、教皇庁公文書官であったハインリッヒ・デニール及びフランツ・エールレと識り合い、中世写本研究への刺激を受けたが、それは彼の生涯の仕事に決定的な意味を与えたものと思われる。そして写本資料の広範な探求に裏打ちされた発展史的方法の円熟した成果こそ、本書に収録された論文群なのである。しかしグラープマンの作品において、発展史的研究がかなり広い領域をしめているとしても、彼のめざすところはやはり、それを通じて体系的問題を論述することにあつた。歴史的視野に立って現代の神学的問題へかかわること、それがグラープマンの本領とするところであり、事実それは、トマス・アクィナスの教会論に関する初期の作品や、本書に収められた、教会と国家についての中世の学説に対するアリストテレスの影響に関する徹底した研究（809—965頁）において証明されている。同様な意味で、多くの外国語に翻訳されたトマス・アクィナスについての諸小品も、現代の哲学・神学的意識の育成に有益な役割を果たしたものである。

グラープマンは1931年の「トマス・アクィナスの著作」において、この発展史的

方法をトマスに適用し、その諸著作の真作・偽作を判別することに成功したのみならず、初期のアウグスティヌスの思想傾向からアリストテレス的の思惟と新プラトン主義的の思惟の創造的総合という後期の円熟した思想の構築に至る精神的発展過程をみごとに解明した。1909年及び1911年には秀抜な大作『スコラ哲学方法史』第一巻第二巻が刊行されている。彼はこれの最終巻（第三巻）をトマス思想の叙述をもっとて飾る計画であった。これが実現されていれば、一、二巻のトマス以前のスコラ哲学発展に関する研究は、思弁的解釈の恣意に流されない歴史的に確かなトマス解釈へ導いたはずである。しかしグラープマンがトマスに至る途上において、膨大な原典に基づく知識から影響史的関係の極めて厳密な一つの初期中世哲学像を展開しえたにもかかわらず、トマス思想を包括的に叙述しないままに終ったことは、おそらくかれの発展史的方法の一つの限界を示すものであったと思われる。それにしても上述の論文群はグラープマンによって一つのトマス像へ導く予備的著述と考えられていたと言えよう。無論このことは、個々の論文のそれ自体の価値をおとしめるものではない。

ところでグラープマンは、トマスが特に認識論と形而上学の領域でアリストテレスの思想を独創的に自分のものとしたことをその哲学的業績とみとめ、同時にこれを導きの糸として、前期スコラとトマスとの連続性を強調することにつとめたが、このことは彼のトマス解釈において特記されるべきことである。さらに彼は、トマスとボナヴェントゥラとの間に広範囲な見解の一致を読みとり、それを明らかにしようとした。時には両思想の調和に意を払いすぎるこの解釈に対して、最近の研究者はむしろ両者間にある相異を鋭く指摘している。最近の研究はまた、グラープマンにおいては充分に射程におさめられていなかったトマスへの新プラトン主義的思想の影響について洞察を深めており、それは、なによりもアリストテレスにその源泉を求めたグラープマンのトマス解釈をこえて、トマス像を広げている。

本書の論文においてはトマス思想自体は前面に現れてはいないが、隠れた中心となっていると思われる。つまりこの中心から彼の諸論文のつながりが理解されるのである。これらの論文はテーマ別にまとめれば、まずトマス・アクィナスに至るまでのアリストテリズムの発展を、次に、トマスと同時代のドミニコ会の思想家及び修道会に属さない教区付司祭——とりわけ、パリのヨハネス・クィドルト Johan-

nes Quidort (69~128頁), シュトラースブルクのウルリッヒ Ulrich von Strassburg (177~260頁), ファーヴァシャムのシモン Simon von Faversham (771~808頁), ジャイアウッドのヴィルヘルム Wilhelm von Shyreswood (1255~1360頁)——におけるアリストテリズムを、最後に、アリストテレス・トマスの伝統をひく思想の、後期スコラにおける発展を扱っている。この最後のグループとの連関で、ドイツのドミニコ会神秘思想に関する写本発見の二つの報告(1~68, 261~381頁)も位置づけられている。

グラープマンの中世アリストテリズムについての研究は、アペラール(アペラールの弁明についての部分 565~606頁も参照のこと)に始まり、13世紀に至るまでのアリストテレスの論理学の発展(1255~1360, 1361~1417, 1419~1466頁)をたどり、エルフルトのトマス Thomas von Erfurt (1801~1896頁)まで及んでいる。この論理学研究をもってグラープマンは、中世の論理学を高く評価するようになった現代論理学の要請にも答えようとしたのである。しかしより重要だと思われるのはラテン・アヴェロイズムに関する研究である。彼はそれによってアルベルトゥス(1897~1986頁)とトマスにおけるアリストテレス受容とアヴェロイズムとの関係を解明することができたのである。それゆえグラープマンが発見したアリストテレスのラテン語訳とその注釈書(第6, 7, 10, 11, 19, 21の論文参照)のなかで、ブラバンティアのシゲルスの多くの著作——これを後にF・ファン・シュテーンベルヘンが活用したのであるが——の発見は最も幸運な掘り出し物といってよいであろう。これらの著作からマンドネによって展開されて来たシゲルス像が修正され、単純にシゲルスが極端なアヴェロイズムの代表者とみなされるべきではなく、むしろトマスの立場にますます接近しているということが明らかになった。そこで、1270年及び1277年に出されたバリの禁令で矢面に立った諸命題の著者に関する問題が残ったが、それをグラープマンはバリ大学人文学部の倫理学注釈書の研究(607~687頁)によって解明することができた。実に、能動知性に関する学説こそが、フランシスコ会とドミニコ会、それにアヴェロイストの間の論争の焦点となったものである。グラープマンは14世紀の写本を手にも、中世におけるこの学説の変遷をあとづけ(1021~1122頁)フライブルクのディートリッヒ及びマイスター・エックハルトがそれをいかにドイツ神秘主義の核心へ溶け込ませていったかを示している。こう

したトマス以後の発展で明らかにされたことは、すでに13世紀におけるアリストテレスをめぐる論争の際、自然哲学や形而上学の問題以上に、人間精神とその自由の本質と基礎に関する問いがより大きな問題となっていたということである。この問いはなるほどアリストテレス受容によって引き起こされたが、本質的にキリスト教の中心にある問題、すなわち被造物とくに人間の理性の独立性と神の存在への分有の関係いかん、という問いに結びついている。トマスにとって能動知性は神的真理の光にあずかる個別の人間の自然の能力であるから、彼はそれによって自立的に哲学することを基礎づけたのである。グラープマンはこれをトマスの画期的な業績として強調している。ところで自由なる哲学的思惟は、神の真理に根ざすことを自覚していることにより、神学との対話は打ち切られてはいないのである。このような自立的で世界に開かれた、しかし極めて深く信仰に結びつけられている思想は、まさにグラープマン自身の著作の相貌でもある。このように研究対象と同質の思惟の態度を持しているがゆえに、グラープマンの著作は、今日の中世思想研究にとってもいぜん信頼に足る手引であり、汲み尽し難い宝庫となっているのである。

(木口須美子訳)

Goulven Madec : *Saint Ambroise et la Philosophie*,
Paris 1974, pp. 449

——最近の Ambrosius 研究の動向と関連して——

宮 谷 宣 史

最近のアンブロシウス研究の一動向を知る上で次の二つの文献はよい手がかりを与えてくれる。*Ambrosius Episcopus. Atti del studi ambrosiani nell XVI centenario della elevazione di sant' Ambrogio alla cattedra episcopale*, Milano 2-7 December 1974, a cura di G. Lazzati, vol. I e II, Milano 1976.

本書は表題のごとく、アンブロシウスのミラノ司教就任1600周年記念として1974